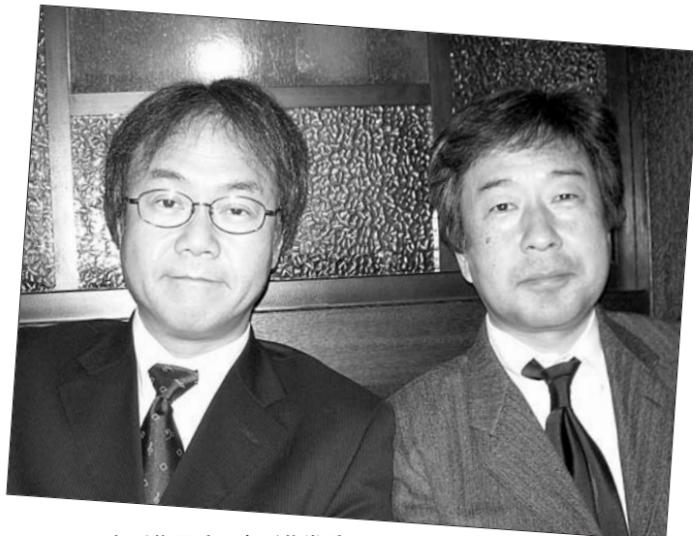




押し掛けレポート

伝説のサラリーマンバンド

「藤岡藤巻」おやじ世代よ、立ち上がれ!



▲左が藤岡氏、右が藤巻氏。
プロモーションビデオにも背広にネクタイ姿で登場する

今、静かに、密やかに、しかし熱い人気を呼んでいるバンド、『藤岡藤巻』をご存知だろうか。40代以上の方なら、70年代半ばに2年間だけ活動していた異色のバンド『まりちゃんズ』を記憶かもしれない。その『まりちゃんズ』オリジナルメンバーの二人、藤岡孝章氏と藤巻直哉氏が30年ぶりにバンドを復活、昨年11月にはCDデビューも果たしたのが『藤岡藤巻』なのだ。

お二人は現在53歳。年齢的にも、失礼ながら見た目も、立派なおやじである。そんなおやじが歌うおやじの哀愁あふれる歌が同世代の心に響いた。それが人気の秘密である。

……と、つついステレオタイプにまとめてしまいたくなるが、実はそういう型に納まらないのが『藤岡藤巻』のすごいところなのだ。

(取材・文/土屋)

◎フォークブームに乗ってデビュー、そして解散…

藤岡氏と藤巻氏が大学を休学してデビューしたのは1974年、フォークブーム真っ盛り頃の頃である。同世代には吉田拓郎、泉谷しげるなど、現在でも芸能音楽界の第一線で活躍しているミュージシャンが多い。

「その中で、コミックソングを歌うグループがあったんです。『あのねのね』とか」(藤岡氏)

「僕らの前だと、なぎら健壺さんとかね」(藤巻氏)

「こんなんならできるんじゃないかと思って始めたの。自信満々だったんだけど、ぜんぜん売れな

くてねえ…」(藤岡氏)

『まりちゃんズ』のデビュー曲、『ブスにもブスの生き方がある』は大きな話題を呼んだが、すぐに放送禁止の憂き目に…。その「ぜんぜん売れなかった」バンドが解散(活動停止)を決めたきっかけは、当時人気絶頂だった天地真理ショーにジョイントし、ツアーに同行したことだった。

天地真理のためのフルバンド、コーラスその他の一大団体と一緒に、東京から北海道まで何週間ものツアー。そんな中で、いつしか同じメンバーで顔を突き合わせていることに耐えられなくなってしまったのだという。時にはホテル

の部屋割りを食べるなど、新鮮味を出す工夫もしてみたが……。

「最後にはメシの食い方ひとつまで、気に食わなくなっちゃって」(藤巻氏)

「この雑誌的に言うと『人事マネジメント』がうまくいかなかったってことですね(笑)」(藤岡氏)

最初のシングルをリリースしたのが74年6月で、翌年の75年7月には解散を決めていたというから、これはすばやい決断だ。活動を停止した後、藤巻氏は大学へ復学、卒業後、大手広告会社に就職してごく普通のサラリーマンとなった。また藤岡氏も、大学を中退、レコード会社の制作担当という普

通のサラリーマンの道を選ぶ。

◎30年ぶりのライブが好評でその気になる

そして30年。お二人は同世代のお父さんたちと同様、満員電車に揺られて出勤し、夜は居酒屋でいっぱい、というどこにでもいるサラリーマンとして月日を送っていた。そこにある転機が訪れた。

「ある時、『あのねのね』と一緒にライブをやってみないかって誘われたんですよ。それで思い立って2人でやってみたんです」(藤岡氏)

会場はキャパシティ500人ほどのライブハウス。聴衆はほとんどが『あのねのね』目当てだった。ところが…。

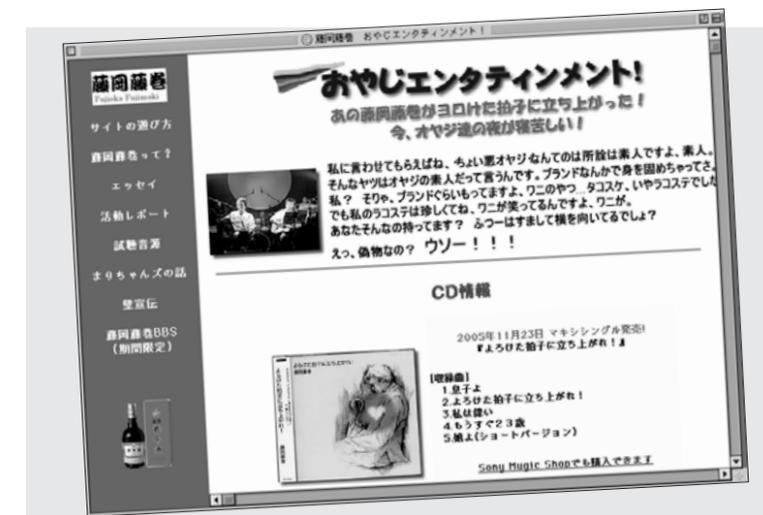
「昔の歌だけでやったんですけど、意外や意外、観客に受けちゃったんです。で、たまたまあるライブハウスのオーナーが昔『まりちゃんズ』の大ファンだったってことで、やってみないかと言われて。今出ているライブハウスがそこなんですけど、そのライブハウスでライブをするようになったんです」(藤巻氏)

当初は『まりちゃんズ』時代の歌がほとんど。だがひとつ、小さな小さな問題があった。

『まりちゃんズ』のレパートリーには『まりちゃん』なる純愛ソングがある。しかしその歌詞は以下のようなものだった。

憧れの女性である「まりちゃん」について「まりちゃんもウンコを

「藤岡藤巻」おやじ世代よ、立ち上がれ!



▲藤岡藤巻の公式ホームページ

伝説のカルトバンド その名は“まりちゃんズ”!

せいりかん
by 静戸 巖

オヤジエイドバンド“藤岡藤巻”。快調に曲を書き散らす彼らであるが、その活動の原点は70年代に結成していたバンド“まりちゃんズ”にあった。ブスを、ホモを、ウンコを軽やかに歌い上げた伝説のスーパーパンクバンド“まりちゃんズ”。

“まりちゃんズ”を知る旅は、“藤岡藤巻”を知る旅でもある。ただ気になるのは、その旅に出たい人がいったい何人ぐらいいるかっていうことなんですけど…。

顔もスタイルもマズク、ついでに歌もヘタクソという三重苦を背負った3人グループ(藤岡孝章氏、尾崎純也氏、藤巻直哉氏)の“まりちゃんズ”は、1974年6月に『ブスにもブスの生き方がある』という衝撃的な歌でデビューした。彼らは約1年半の活動中に3枚のシングルと2枚のアルバムを残したが、所属のエレック・レコードの倒産に伴い、ヤングジャパンに移籍。間もなくグループ活動を停止するが正式な解散はしていない。

レコードライナーのプロフィールには、藤岡孝章(S27/6/5生、通称=ジェフ、特技=でんぐり返し、ベーゴマ、メンコ)、尾崎純也(S27/4/4生、通称=スティープ、特技=音程をちょびつとはずして唄うことが出来ること)、藤巻直哉(S27/8/20生、通称=ポール、特技=はずれた音程でもついていけること、特徴=色は茶色しか知らないこと)と適当に紹介されている……

▲「まりちゃんズとは」藤岡藤巻のHPより

するのかな? まりちゃんのウンコもクサイかな? いや、まりちゃんがウンコなんかするはずない……これはかなり特異な歌詞と言わざるを得ない。

「ねえ〜。この年になってウンコとか歌うのもモラルに反するか

なって思っただけ。僕らも大人になっちゃったんで。それで新曲作らないとまずいかなと」(藤岡氏)

さて、何を歌えばいいのか。リアリティがある歌は何だろう。そう考えて、自然に行き着いたのが息子に切々と人生の真実について



▲定例のライブ「コドモにはナイショです」にはコアなファンがどっと詰めかける。南青山のライブハウス『月見ル君想フ』にて

ラされたお父さんの歌を歌っても人の心に響くだろうか。しょせん絵空事と思うのではないだろうか。けれども『藤岡藤巻』は違う。

「僕、実際、職安行きましたからね」(藤岡氏)

「シャレになってないって(笑)」(藤巻氏)

「それから30年が過ぎて、僕らの世代はもう今の吉田拓郎さんや泉谷しげるさんの歌には共感できなくなっちゃった。そういう、僕らみたいなお父さんはもう彼らの歌では癒されないんだよね。だからって、僕らがそういう歌を作ろうと思ったわけじゃないんだけどね」(藤巻氏)

音楽プロデューサーとして、藤岡氏は「おやじバンド文化祭」なるイベントを企画したことがある。なんと350組もの「おやじミュージシャン」が集まり、青春時代にコピーした歌、またオリジナルの曲を披露したという。

「『孫』って歌あるでしょ。あれは素人のおじいちゃんが、孫ができて本当に嬉しくて、それを素直に歌ったらヒットしちゃった。それと同じことが今後も起こるんじゃないかと思うんです。フォークでもロックでもね。この雑誌を読んできださっている方の中にもやってみたい人、やれる人、いるんじゃないかな。だって、僕らの世代はほとんどのヤツが、一度はギターを弾いたりしてたんだから」(藤岡氏)

考えてみれば、ボブ・ディランだって今は立派なおじさんになっている。若い頃、フォークやロックで自らを表現していた人たちが、おじさんになったからといってそれを放棄することはないのかもしれない。

「これから団塊の世代が引退するでしょ。そしたら今までみたい

にやらなきゃいけないことじゃなくて、自分のやりたいことができるようになるよね。そういうこと見つけてやっていけばいいと思うんです。僕らだって同じ。やりたいからやってる。だって20代の時もやりたくてやってたんだからさ」(藤巻氏)

◎日常を楽しむ姿勢が観客の共感を呼ぶ

現在、藤岡氏は音楽プロデューサーとして独立しているが、藤巻氏は大手広告代理店のサラリーマンのまま。だからライブは平日の夜、会社がひけてからに限られる。舞台衣装は普通のワイシャツにネクタイ。要は会社帰りそのままの姿なのだ。また、会社の仕事をおろそかにはできないため、リハーサルの時間もなかなか取れないという。

会社員である藤巻氏には、時間調整の他にも悩みが多い。ライブの夜はギターを抱えて出勤することになるが、それを会社に持ち込むわけにはいかないため、駅のコインロッカーに預けたり、顔見知りの喫茶店に置かせてもらったりと苦労する。「やりたいからやってる」という言葉がよく分かる。

では休日は?とお訊ねすると、異口同音に「家事」というお答えが返ってきた。

「洗濯とかね。新婚のまだスイートな時代に、いいよいいよ俺がやるよって言っちゃったのが失敗だったねえ」(藤岡氏)

	<p>藤巻直哉 (Fujimaki Naoya) 1952年8月20日生。大手広告代理店にて、『ブリストラー』をはじめとする映画のプロデュースに関わる。またジブリの『もののけ姫』では声優として大活躍(※) ※セリフはサンが跳ぶシーンで「跳んだ」と5人ぐらいで言うところと、侍の役で「くそう、浅野のなんとか……」というこのみ。</p>
	<p>藤岡孝章 (Fujioka Takaaki) 1952年6月5日生。ソニー・ミュージックエンタテインメントでディレクター、プロデューサーとしてシブがき隊、加藤和彦、央戸留美他、40組以上のアーティストを手がけた後、F2エンタテインメントを立ち上げた。でも、社員はいません。</p>

▲「プロフィール」藤岡藤巻のHPより

「僕らの仲間の奥さんはたいてい燃えないゴミの日がいつか知らないですよ」(藤巻氏)

言葉の底に優しさがある。それは『藤岡藤巻』の歌にも通じる優しさのように思う。

今、『藤岡藤巻』は2ヵ月に一度程度のペースでライブを行っている。一度のライブはだいたい2時間半ほど。その半分以上がトークなのだそう。話す内容は、日常に起こったことがほとんど。「役者じゃないから」作ることはしない。それが観客の笑いと共に共感を呼んでいる。

今後はご自身の活動のみならず、「おやじミュージックシーン」をも盛り上げていきたいとお二人は語る。

「僕らがある程度盛り上がってきたら、他の人も何だこんなんでもいいのかって、どんどん出てきてくれれば嬉しいなど。そしてそういう人たちをプロデュースして世に出して、おやじエンターティナ

ー専門のレコードレーベル作ったりしてね。だって死ぬまでできますからね」(藤岡氏)

「自分で楽しむのがいちばん。今までやったことない人でもいいんですよ。スタイルなんてどうでもいいんだから」(藤巻氏)

『藤岡藤巻』のお二人のお話を聞いていると「自然体」という言葉が浮かぶ。肩ひじ張らず、笑うところは笑い、自嘲するところは自嘲する。そんな軽妙なスタイルが何ともカッコいい。

「自然体? 違います違います。いっぱいいいっぱいな(笑)」

本当に洒脱なおじさんたち。『藤岡藤巻』のお二人のような素敵なおやじ世代にもっと表へ出てきてほしい。もし会社の中でくすぶっているのなら、もったいないことこの上ない。

高年齢社員活用のヒントにもなりそうな、今後のおやじミュージックシーンに期待大だ。

語り掛ける『息子よ』、娘より年下の女性を好きになったおやじの心情を歌う『娘よ』、『よろけた拍子に立ち上がれ!』などなど、切ない中にも何か笑える歌の数々だったのである。

ご自身「おじさんの愚痴みたいな歌」と言うそれらが、同世代の男女たちだけではなく若いOLたちにも受け入れられた。元気を貰った、という声も多いという。

「何がいいか分からないですけどね。そんなたいしたもんじゃないですね(笑)。でもね、この年にならないと気が付かなかったことってあるでしょ。体の衰えとか、世の中の諦め方とかね。自分の可能性だっただいたい見えてきた、そういう観点から歌を作れるようになったし、作ってきたなって感じはしますね」(藤岡氏)

若い歌手や、ある程度の年齢であっても芸能界でバリバリ活躍し続けている歌手が、例えばリスト

◎団塊のおやじにエール——やりたいことをやっちゃえ

60年代後半から70年代前半の「フォーク」という言葉には、独特の雰囲気があったのではないだろうか。メッセージ性があり、プロテストソングと言われるものがあった。当時のニュースフィルムなどを見ると、その時代の熱さは何とはなしに感じられる。少なくとも、今とは何か違うように思う。

「あの頃は吉田拓郎さんや泉谷しげるさん、岡林信康さんなんか僕ら学生の代弁者で、『人間なんて』とか『春夏秋冬』とかそういう歌を歌ってた。僕らはそんな歌を聴いて、そうだそうだって共感を覚えたわけでしょう。でも…」(藤巻氏)

それがいつのまにか、そんな若者たちの大部分は普通のサラリーマン、普通のおじさんになっていた。そう『藤岡藤巻』のお二人のように。